

川上弘美「水声」論

— 自身の物語を取り戻す物語 —

高松 楓

はじめに―物語とは何か

人は誰しも生きるなかで苦しみや痛みを受け、それを抱えたり忘れたり抑圧したりしながら日常を送っている。例えばそうした体験を得るのは、大切な人に死なれたときや自身の尊厳をひどく傷つけられたとき、タブーを犯してしまったときなどがある。自分自身の根幹を揺るがすような出来事に遭遇したとき、人はその体験について、容易に語るができなくなる。

だが、そのような容易には語れない体験は、その人にとってきわめて重要な意味を含んでいる。それを見出すことができたとき、苦しくつらい体験がその人の生を支えるかけがえのないものとなる。そうした言葉にしにくいものを、どうにか言葉にし、自分自身の納得できる筋道を構成して語り直せたとき、固有の〈物語〉^{注1}となる。また、この〈物語〉を創り出す過程が、その人の苦しみを

を癒し、絡まりあった感情を解きほぐすのでもある。以上のように、大変な痛みをともなう重要な体験を、自らの言葉で語り、それを自分自身の人生の中に位置付け、編み直すことを、〈物語化〉という。

この〈物語化〉は、語り手にとってその体験が大切であればあるほど、あるいは苦しみや痛みが大きければ大きいほど、複雑に絡まり、これをほどこいて道筋をつくることは困難を極める。〈物語化〉の過程においては、死を選び取りたくなるほどの苦しい体験を何度も思い起こさねばならず、場合によってはその人の人生という長い時間をかけて語り直す必要もあるのだ。

本稿で扱うテクスト「水声」の語り手・都も、そうした大変な〈物語化〉の行為を行った一人である。都の〈物語化〉がいかに困難なものであったかは、語りの時間が混迷を極めていることからうかがい知ることができる。

一、物語を作る困難さ―語り方

「水声」の語り手・都の現在は2013年^{注2}である。しかし、現在とはほとんど語られず、記憶を整理することに多くのページが割かれている。さらにその語りの順番も時系列ではなく、いつのことが語られているのか判断しづらく、ひどく混乱した印象を受ける。また、現在よりも過去の記憶のほうが生々しく語られ、現在はひどくぼやけた印象だ。これは、語り手にとって意味づけをすることができないほど大変な出来事を抱えこんでいるために、現在を支えるはずの過去が過去になりきらず、絶えず現在に侵入しそれを混乱させているからなのである。

都が重要な体験をした年は、1986年、都の母親であるママが亡くなった年である。実はこの年には、もう一つ、都を困惑の中に突き落とす出来事が起こっていた。それは、弟・陵との近親間における性的交わりである。都と陵はママが亡くなる直前にセックスをしているのだがその時のことは、物語の途中まで、「その年」や「あの夏」とのみ表されており、具体的な時期については言及されていない。とは言え、「その」や「あの」という指示語を用い、曖昧ではあるが、都がそのできごとをテキスト中で繰り返して語ろうとしている点に注目したい。都は、この出来事が自分自身にとつ

てどのような意味を持つのか、三十年経とうとして現在においても未だに整理できずにいる。単にそれが近親相姦だからということだけではなく、実は都にとって陵との行為は大変大きな意味を持つている。しかしそれを語るための言葉を都は持つておらず、三十年近く語りを封印せざるを得なかったのだ。

都にとつて1986年という年は、ママの死と陵とのセックスが重なり合つて思い起こされる特異な年である。しかし、「1986年」の章に至るまでは、都は陵とのセックスのことを語らない。これは、この章に至るまで都がこの年の二つの出来事を自身の〈物語〉内に納得のゆく形で組み込めていなかったことを意味する。なぜ陵と交わつたのか、そしてそれがなぜママの死と同時期に行われねばならなかったのか、これらの問いの答えを見つけ、〈物語化〉することが、都が今を生きるためには必要はずだ。

語り手・都は身体感覚やイメージを結びの糸としてエピソード同士をつないでいる。これは、テキストを眺めた時に、各段落に配置されたエピソードに必ず何らかの身体感覚の描写やイメージが表れている点、さらにそれらが、段落同士をつないでいるという点から証することができる。このように、語り手の特徴は、出来事を時系列順ではなく自らの身体感覚やイメージのつながりや変遷によつて語ろうとするところにあると言えよう。例えばそれ

は最初の章である「1969年／1996年」をみてわかる。

二つの年をつないでいるのは、都の連想力である。1969年と1996年という三十年近くも隔たった年の出来事を、都は論理や時間の推移ではなく、イメージや身体感覚を用いた連想によって結び付けようとしていた。例えば、横たわる身体のイメージから寝室やママの死を連想したり、草の匂いからアスファルトの匂いを想起したりして次の話題へと語りを移している。

都は逆に言えば、整理されたストーリーとして自身の体験を語るができない。すなわち物語を自ら創る力である〈物語生成力〉が充分ではないのだ。この〈物語生成力〉については後に詳述するが、この能力は、自分が物語る主体であることに違和がなく、ある程度客観的に自身の体験を見ることができないと、持つことの難しい力である。

「水声」を語り始めた時点の都は、自分自身の〈物語〉を紡ぎあげるには、語る主体としての自己意識が不充分であった。なぜなら都はママの語る魅力的な〈物語〉を支える脇役として、ママの〈物語〉の一部に組み込まれてしまっているからである。〈物語〉を語る主体としての都の自己意識は、〈物語生成力〉の強いママによって奪われてしまっているのである。

また、都は当時のことを〈物語〉として語りうるほどには体験

から心理的な距離をおけていない。「あの夏」や「その年」という具体性を欠いた言葉を使うことにより、都は正確に記憶をたどることを避けている。わけのわからない絡まりあった記憶を、整理することなく、意識下に押し込めているだけなのである。そしてそれらの記憶は、ふとした瞬間に意識に上ってきては都を混乱させるものとなる。都はそれらの絡まりあった記憶を一つ一つ思い起こし、整理し、一つの〈物語〉として語り直す必要があるのだ。

二、都とママの関係―絶対的なママの存在、

惹きつけられる都

さて、ここ十年くらい^{注3}、母娘関係の難しさについてカウンセリ
ング的な視点から論じた書籍が相次いで出版されている。それら
で繰り返し指摘されているのだが、なぜ母娘関係の問題は複雑に
絡み合い、なかなか解決を見ないのか。

母と娘の関係は、単純な愛着関係に落ち着くことはまず少ない。
たとえ表面上はとも仲の良い愛のあふれるような関係に見えた
としても、実は娘が母の意向を先取りしてそれに従っているよう
な、母のコントロールが潜んでいる関係であることが少なくない。^{注4}
意識的であれ無意識的であれ、娘は母の価値観を自身の内に取り
込み、母の望むように生きてしまうのである。

母は、娘たちに対して進学や就職、結婚や出産などに関して期待をよせる。たとえ母親がそれを直接娘に言わないとしても、娘は事あるごとに母の表情やちょっとした素振りから、母の思いを読みとってしまう。なぜなら母の意に沿わないことによって母の愛を失うことを恐れるからだ。

多くの母親は自分自身が娘を縛りつけコントロールしているとは思っていない。しかし、娘は母親のかすかな期待や失望などの感情を敏感に察知し、母の思惑に従ってしまうのだ。そして、たとえどんなに支配的でなく見える母であっても、むしろ素晴らしい母親だと娘が感じていなければならないほど、娘は自身の内に根深く母の価値観を染み込まされ生きているのである。

もちろんそのことが必ずしも娘にとって生きづらさを覚える原因になるとは限らない。娘自身が母の価値観を自身で選び取り、自身の生き方と合致しているという実感があれば、問題になることはあるまい。しかし実際のところ、娘たちは自身で選ぶも何も、物心つかぬうちから間近で母の価値観を吸収しながら成長しているのだ。自身の内に根付いた母なる価値観を娘は軽々しく捨てることができない。内なる母親を殺すことは、自分自身の大きな一部分——場合によっては自身の拠り所となっていた基盤——を殺すことに他ならないからだ。

都のママは、現代の母娘関係論において指摘される母親像のように、娘をコントロールしたり、娘に過剰な期待を抱いたりする母ではない。むしろママ自身は娘である都に、自由に生きることをも勧めている。それは亡くなる前に都に対して発した、何かを「してもしなくても、後悔しちゃだめ」という言葉にも表れている。さらにママ本人は、制度上の結婚をせずに子供を生み、腹違いの兄を子供たちにパパと呼ぼせるという、世間に逆らっても自分の意志を通す自由な生き方をしている人物であり、娘にこうあって欲しいという凝り固まった考えを押し付けるようなことのない母親なのである。

それでも都はママに縛られてしまう。その問題は都自身の自覚が及ばないところにあつた。

弟の陵と再び暮らし始め、共に眠るようになった頃から、都はママの夢を見るようになり、そこから彼女の抱える問題が浮上してくる。都は夢の中のママに、陵と住みはじめたことを告げるが、夢の中のママはそれを非難するような反応をした。それによって都はママに対して恐れを感じてしまう。言うまでもなく、夢の中のママとは、都の心理的投影を受けている存在である。すなわち、都の潜在意識の中には、陵との近親相姦的關係を裁く者としてママがいたと言えるだろう。

また、ある夢の中では、都とママは二人とも少女となつて仲良くなつていた。それにもかかわらず、陵のこととなると夢の中のママは都にきつくあたる。都は度重なるママの責めによつて、自分が「引き裂」かれ、ついには自分が「死体」となるようなイメージを持つに至る。まるでママに自分が殺されるかのようなイメージである。

先ほど確認したように、生前のママはたとえ、都と陵が共に暮らし、性的な関係を持ったとしてもそれを責めるような人物ではなさそうだ。それはママ自身が、実の兄と共に暮らし、お互いにパパ、ママと呼びあい、キスをし同じベッドで寝ていたということからも推察できる。

このように、実在のママは、都と陵の関係を責めるような人物ではなかつたにもかかわらず、都は自身を責めたて許さぬような影響力の強いママを夢に見てしまうのである。これは、ママが人を惹きつける強力な魅力を持っていた人物であると都が感じていたことと深く関係している。

まず、ママという人物は、都だけでなく周囲の人間を惹きつけ、自身の華々しさを支えるための要員として巻き込むところがあつたと、語られていることを確認しておきたい。

ママはかつて、自分は女性には嫌われることが多かつたと語つ

ていたが、男性には好んで寄つてくる者が多くいた。まるで甘い香を放つ花に虫がひっきりなしにつくように、周囲には彼女に惹きつけられた「男たち」がいつもいた。ママは男を振り回す、気が強く華やかで独特な女としての魅力に満ち溢れていたのだ。

強烈な魅力を持ったママに惹きつけられた「男たち」は、だが、ママと交際したり結婚したりするわけでもなく、共に生活を営むわけでもない。だが、まさにそのような赤の他人であればこそ、程よい距離が置け、何の複雑な思いもなく好き勝手にママの魅力を称賛できるのである。

一方、このような並外れた魅力を持つ人間の影響下にあり、深く関わり、近しい者として生きる時、人は必ずしも幸せとは限らない。こうした立ち位置にいる都と陵とパパと武治さんの四人のあり方について検討したい。

この四人の中で最もママから距離があるのは武治さんである。彼は都と陵の遺伝子上の父親だと主張している人物だが、ママの家族ではない。他に家庭があり、妻と子がいる。その武治さんでさえ、ママの魅力には抗えなかつた。武治さんは、都と陵が幼い頃からお土産と称したママへの贈り物を持つては、度々ママのもとへとやつてきていた。表面上は、パパやその子供たちに会いに来ていたかのように振る舞いつつも、武治さんが会いに来ていた

のはママに他ならない。ママに振られ続けてもなお武治さんはママをあきらめられなかったのである。

次にパパについて考えたい。パパはママの腹違いの兄であり、本来は実家の紙屋を継ぐべき人間であった。しかし紙屋が「商売を身内で固めた」ことを嫌がり、パパは実家から逃げた。そして父親から帰ってくることを強く望まれながらも、実家から逃げ続けていた。これほどまで身内を避けて家を飛び出したにもかかわらず、陵が生まれた後にパパはママと暮らすことになる。その理由をパパは「ママにつかまっちゃった」からだ、また同時に自分ではどうすることもできない「巡りあわせ」だったからだと都に話している。次の引用部分は、都が大学生で陵が高校生であったころの都たち家族の様子である。

ママから逃れるのは、不可能だった。みやこ、と呼ばれると、わたしの体は磁石にひかれる砂鉄のように、ママに吸いよせられた。りょう、と呼ばれた陵は、抗いながらもママのもとへと馳せ参じた。ママからいちばん距離をおいていられたのはパパだったけれど、その飄々としたパパでさえ、ママの呼び声にはさからえなかった。

そのかわりともいうように、陵もわたしもパパも、互い

を見ないように聞かないように、していた。その様子はまるで、実体をもつただ一人のママの周囲を、半透明な三人が常にそぞろ歩いているかのようだった。

それは、都と陵も成長し、家族が別々に行動するようになり、お互いに顔を合わせる機会も減っている時期であった。にもかかわらず、ママだけは家族を自らに引き寄せることができる唯一の存在であったのである。この家において、ママだけが「実体」を持つっており、ママが中心であり、ママがこの家の主役であった。都たちの存在感が薄く感じられるほどママの存在は際立っており、その上ママから離れていくことはかなわず、彼女に呼ばれると皆傍へ引きつけられてしまう。

都や陵に比べると、パパはママからある程度距離を置いていたようであるが、それでもママの求心力にはかなわなかった。次に陵がどのようにママに惹きつけられていたかについて考察する。

陵は、ママが男たちを惹きつけ振り回す様に苛立ちを感じている。都は陵の様子を「男たちに嫉妬していた」と解釈している。ママに対する腹立ちであれ、男たちに対する嫉妬であれ、自分の母親であるママが男たちを魅了していたことを、陵が好ましく思っ

ていなかっただことは確かである。陵は、奈穂子の母親の満寿子さんが母親らしい母であることを「うらやましく」思っていた。陵はママが母親らしく振る舞わないことに不満を抱いていたのである。しかし陵はママを嫌いであるとは言わない。

陵は、男を誘引するようなママや、それにつられて寄ってくる男たちを嫌っていた。しかし同時に、母親とスキンシップをとろうとするなど、思春期の男子には珍しいほど母親に執着している様子が見られる。陵はママに対して好きであると同時に嫌いであるという、強いアンビバレントな感情を抱いていたことが伺える。

また、家族の成員同士の関わり方が希薄になっていった時期において、ママが声をかけると陵は、その声に抵抗しようとしながらも、簡単に呼び寄せられ、駆け付けてしまう。ママが男を振り回すことを非難し、「ママの意味が分からない」と突き放した言葉を発しながら、陵もまたママに惹きつけられ、離れることができなかった者の一人なのである。

では、娘の都はどのようにママに惹かれていったのだろうか。都は、数多の「男たち」とも、武治さん・パパ・陵とも異なった惹きつけられ方をしていた。

まず都は、ママの魅力的な昔語りを聞く役割を担っていた。「ねえやたち」の章で、都は幼い頃にママから聞いた、ママの昔の話

を思い出している。ママは女中のたくさんいる家で、大切にお世話され育ったという。都は、ママの昔話を「まるで誰かが読んでいる本の中のことごとくのように」聞いたと語っている。都にとつて幼い頃のママは、物語の中のお姫様のような存在だったのである。都はそのようなママの昔話に「あこがれごろ」を抱いていた。自分の生きるころとはまるで違う世界に生き、そこではあたかもお姫様であるかのように大切にされていた主役のママに対する「あこがれごろ」という表現に、都の強い羨望を読み取ることが出来る。

ママの魅力的な昔語りは、主に都に向かってなされていた。都が記憶している限りでは、パパはママの昔話の場にすら居合わせていなかった。陵もまた、ママの昔話の場に居合わせるの、テクスト内に一度きりのことである。その時の陵の反応を、都は覚えており、「めずらし」と表現している。すなわち、ママの話に質問したり相槌をうったりするのは基本的に都だけであり、つまりママの昔語りを聞くのは都の役割となっていたということになる。

ママは自身の昔話を、魅力的な物語として都に聞かせることで、自身の生きてきた人生を、肯定的な〈物語〉として語り直していたと考えられる。ママは都を聞き手とすることにより、〈物語生成

力」を発揮し、自身の強固な〈物語〉を生み出していたと言えよう。都はママの〈物語〉を支える者として、何度も語られる〈物語〉を、肯定的に聞き続けていたのである。幼いころから現在まで、「ママは魅力的である」という〈物語〉を聞き続けてきた都は、ママを批評する力を養うことが許されないまま生きてきた。そのため、テキスト中盤まで、都の語りはママを非難したり、否定したりすることができていない。都はママを魅力的な人物として語り得なかったのである。

「ママの死」の章でママが亡くなる少し前のことを都が思い出している場面がある。ここではどのような言葉使いであつてもそれが似合う素敵なママを回想し、都は自分がママのことを好きであることに何の疑問も持っていない。中学生の頃の都も、母親に対して複雑な感情を持っていた奈穂子や陵と違い、ママを好きなことに少しの違和も感じていなかった。奈穂子と陵はそれぞれ、自分の母親に対して好きと言いきれなかったのに対し、都は奈穂子に母親を好きかどうか尋ねられると躊躇なく「好き」と答えている。そして都はそのことに何の不満も感じていない。都にとつて、ママは好きであるとしか語れない存在であり、ママに対して否定的な感情を持つことすら許されないのである。都にとつてママは魅力的で理想的な物語の主役であり、ママを語るには、華や

かでうっとりするような言葉を用いるしかなかったのである。

その上、魅力的な母親に育てられた都は、意識しないうちに、ママの価値観を取り入れてしまつてもいる。都は、自らママの言葉使いを真似たり、ママのように生きようとしたりはしていない。それにもかかわらず都はいつの間にか、考え事をする時などに「ママの言葉で考えて」しまつと語る。都にとつてママは「女の原型」であり、基準なのである。自ら何らかの価値観を選び、取り込もうとする前に、すでに染み込んでいるママの価値観が都の内から支配するのである。

そして、都の内側に根付いたママの価値観は、ママが亡くなつても死ぬことはない。都はその感覚を次のように語っている。

ママはとうに死んでしまったのに、まだわたしの中にいる。だから、わたしは一人でいても一人になれない。いつだって、ママはどこかにいてわたしを眺めている。

2013年の現在、ママが亡くなってから三十年ほどが経っている。それほど長い年月を経ても都はママの価値観を内在化させたままで、ママイメージを自分を監視する者として作り上げていく。ママの価値観を守り維持し、ママを称賛させる監視者が、都

の中には存在するのである。

もし都がママのように〈物語〉の華やかな主役となれたとすれば、都は自分自身の〈物語〉をつくることに困難を感じて苦しむことはなかっただろう。しかし都はママのようにはなれないことを感じながら生きてきた。また、ママのようになりたいかどうかということ以前に、誰もママのようには「なれない」と考えていた。彼女にとってママは唯一無二で、なりたい／なりたくないという軸で判断できるような存在ではなかったのだ。

ママとは違う自分を決定的にしたのは、例えば、ママの香水にまつわる夢の出来事である。「夢」の章の中でママの香水の匂いを嗅いだ都は、ママの香水にまつわる記憶を思い出す。この時も都はママの魅力をまず語る。それによると、ママは「シャネル19番」を使うことで自分自身の魅力を引き立てることができる人であった。それに対して自分は、この香水が「ちっとも似合わなかった」と語る。ママがつけるとうっとりするような香りを放つ香水が、自分には全く似合わないことを、都は夢の中でまで思い起こさずにはいられないのである。都は、ママのようになれないことを、自己コントロール力が衰えるはずの夢の中ですら、強く意識していることがわかる。

このように強いママイメージの呪縛から抜け出すためには、マ

マの〈物語〉を支える役割を捨て、都自身の〈物語〉を自ら作り出す必要がある。しかし、都が自分の〈物語〉を生きることが簡単ではない。なぜならそれは、彼女の内なるママイメージを殺すことであり、それは、これまで生きてきた自分自身をも殺すことに他ならないからである。

都がママの〈物語〉を捨て、自身が生きる主体である〈物語〉を自ら選ぶためには、これまで魅力的としか語り得なかったママを批評する力をもたねばならない。つまり「水声」というテクストは、都という語り手が、ママから〈物語生成力〉を取り戻してゆく物語なのである。

語り始めたころの都は、ママを批判することができなかった。しかしこの物語を語るなかで、都は少しずつママを批評する力身につけていく。都がママに対して否定的な感情を初めて露わにするのは、テクストの半ばにある「夢」の章である。夢の中のママは幼い姿をしており、にもかかわらず「すでに自信たっぷり」な様子であった。この「夢」の章に至り、都はママに対して「憎らし」という否定的な感情を、ようやく語ることができたのだ。意識水準が下がった夢という場であることに加え、幼い少女の姿となったママが相手であれば都は自らを抑圧することなく感情を表現することができる。そして夢の中の少女のママと仲良くなり、

戦時中のことを話すうちに、都は昔ママと言いつ争いをした時のことを思い出す。

ママが生きていた頃は、ママに戦争のことを持ち出され、それに比較すれば現在が幸福であることと決めつけられると、都は何も言い返せずに黙るしかなかった。しかし、ママの年齢を越した現在の都は、ママの「母親がいさえすれば幸せ」であるという持論を否定できる。その時はじめて、ママが自分と「きちんとした関係」を持つてくれていなかったことに対する怒りを表現することができると。夢の中のママとの関わりを通して、都は自分がママに対して憧れや愛情という好ましい感情だけでなく、怒りや憎らしさという否定的な感情をも抱いていたことを思い出し、それを、ようやく自分の言葉で物語ることができるようになったのである。

このように、都は「夢」の章において、自分の言葉でママを非難することができるようになった。だが、現実においてママイメージは相変わらず都を縛るものとして働き続ける。

都が抱くママイメージが、都を縛り付けるものではなくなるのは、最後から二番目の「1986年」の章である。そこでは、都と陵が交わる場面と、ママが死にゆく場面とが交互に語られる。ママから陵との関係を禁じられていると思いつ込んでいた都は、マ

マの「してもしなくても、後悔しちゃうだめ」という言葉を、この章に至って初めて思い出し、それを語ることができるようになっている。ようやく、自身を責めるママイメージを変化させることに成功したのである。

また同章には、亡くなる前日のママの言葉も回想されている。死ぬ前日にママは自分が死ぬことを都に謝っている。憧れの超越的な存在、絶対的な影響力を持つママが、この場面では「どうやって死ぬかは、決められない」ことを悔しがっている。都の中にあつた、神々しい魅力を放つまでに膨れ上がったママイメージは、この時、都と同じ無力な人間としての姿を取り戻すのである。これは、これまで苦しめられてきた、自分の中の象徴的なママを殺し、それでも自分は生きのびることのできた貴重な体験と言えよう。

この章の最後で都は、「自分の笑い顔」を「きつとママに似ている」と自身をママに近しい者の位置に据え直している。この時点の都にとつて、ママはもはや自身が到底及ばない存在ではない。距離を置いて語ることでできる一人の人間であり、自身の母親であり、近似するところのある他者なのである。

三、語り手都と陵との関係―交換不可能な他者

都は、絶対的な存在であるママに自己の中心を奪われていたが、

ママの記憶を回想し直しながら、ママへの批評力を培い、ママを一人の人間として対象化できるようになった。それは自分自身をママから奪還することを意味する。

しかしながら、都はママのような強烈な個性も強い自我も持つてはいない。つまり、周囲の人間に自己を支えさせることも、また、自己の中心に強い自我を持つという近代的な個人としての生き方もできないのだ。自身の中心に存在したママを失った都が、それでは自分の物語を生きるにはどうしたらよいのだろうか。

そこで重要になるのが、かけがえのない他者との関係である。『「聴く」^注ことの方』のなかで鷺田清一は次のように述べている。

求められるということ、見つめられるということ、語りかけられるということ、ときには愛情ではなくて憎しみの対象、排除の対象となつていのもいい、他人のなんらかの関心の宛て先になつているといことが、他人の意識のなかで無視しえないある場所を占めているという実感が、ひとの存在証明となる。

たとえ憎しみや排除の対象だとしても、人は誰かに必要とされることで、自己の存在を確認することができる。そしてその「誰

か」が、具体的に個別的な、自分にとって特別な他者であるほど、自身の存在は確かなものとなる。家族や恋人や友人など、近しい他者にとって自分が重要な他者として存在していることを認識できた時、人は自分を初めてこの世に生きている意味をもった人間として認めることができるのだ。

都にとつて、その「近しい他者」が陵なのである。「水声」を語り始めた当初、ママが一番重要な他者であった。しかし、自身の記憶を詳細に思い出す中で、陵というかけがえのない他者を見ける。

都にとつて陵とはどのような存在であったのだろうか。陵は都の弟である、にもかかわらず、「さからうことは、絶対にできなかった」と語っている。陵は弟でありながら、抗うことのできない力を持つている者として都には感じられていたのである。

陵は都の語りによって、ママに通ずるような、超越的な魅力を持つ者としてテクスト内に顕現している。小学生の頃から「なんでもできる子供」であった陵は、成長する中でその魅力を発揮していく。

まず、陵は食べ方が上手で、都はその美しい姿に見とれていた。そして、それに比べて自分の食べ方があまりに「不器用」であることを痛感している。陵はママの作る華やかな料理を美しく食べ

ることのできる、特別な人間として都に語られるのだ。

また、陵は歩き方も美しい。陵は靴にこだわりのある人物であり、杉並の家に引越してくる際の荷物のおくは靴であったほどだ。そのたくさんのお靴は都にはわからない。「正しい順番」で棚に納まっている。しかも、どの靴にも「履き癖はまったくついていない」。ダンサーやスポーツ選手のような身体の使い方に普段から神経を使っている人間でないにもかかわらず、陵は履き癖を全くつけないで歩くという。ここでもやはり陵は超越的な存在として語られており、比べることで自分の歩き方の不恰好さに落胆してしまうのだ。

さらに、陵は「ママに似ている」と都はいう。ママが男たちを惹きつけていたように、陵もまた「女たちを引き寄せ」ていたのだ。大学生の頃、陵には入れ代わり立ち代わり恋人ができた。だが、恋人の女たちはみな「影がうすかった」という。女たちはもともと存在感がなかったのではなく、陵に引き寄せられ、自分の意志では離れられなくなり、追い詰められ、結果、影が薄くなつたと都は解釈している。女たちを惹きつけ、惹きつけられた者を逃れられなくする様は、ママが男たちや都を吸い寄せ中心に君臨する様子と重なるものがある。

さらに、陵はママに似ているだけでなく、ママに愛されてもい

たと都は感じている。都と陵がママの昔語りを聞いていた時の、「陵をうむことができたから」女でよかったというママの発言を、都は苦く思い起こす。この時偶然、陵一人が肩を揉んでいたため、ママは都の名を出さなかったようだ。ママにとって都よりも陵を産んだことがより喜ばしい、という意味はこの発言に含まれてはいないはずである。にもかかわらず都は、自分よりも陵の方がずっと愛されていたと感じてしまう。

また、都はママの習ったフランス料理をママから習いたかったが、ママはそれを喜ばなかったと語る。ママの料理を受け継ぐのは陵であり、陵こそがママの大切な子どもとして語られるのである。

しかしその一方で、都は陵を自分のものとも感じていた。都は陵が生まれた頃のことをよく覚えており、生まれたばかりの陵を見つめたとき、「わたしのもの」であると感じたと言っている。都にとって、陵はママの息子であると同時に、自分自身のものであるのだ。

幼い頃、雹が降ったときにも、やはり都は陵を自分の手の内にあるものとして認識していたことが語られている。幼いながらに都は弟を守り支配しようと思いきり抱きすくめていた。しかしママが登場したことにより、陵はあっけなくママのものとなり、都もママの

ものに「なりさがつてしま」う。都はそれを「いまましいこと」と表現している。都にとって陵を奪われることは、たとえママにであつても受け入れがたいことであつた。この陵への執着こそが、ママの絶対性を崩すカギとなつていく。

そしてさらに、都はママの知らぬところで、陵が最初に口にする言葉を教え込んでいた。赤子が発する最初の言葉は、母親やご飯を意味する「マンマ」という語であることがほとんどだろう。しかし陵は、都に毎日何度も「いやな子」と言いつづけられたことにより、「ヤーヤー」という最初の単語を発することになる。本来であれば母親であるママが呼ばれたはずの初めての言葉を、都はママから知られぬうちに奪つていたのである。

このように、ママの息子である陵を自分のものにとらえ、ママの知らない陵を知っているということが、ママの絶対性を崩し、都がママから自己の中心を取り戻すきっかけになつているのだ。陵との関係を密にすることが、ママの物語を抜け出し、自分の物語を作る助けになるのである。そのため、陵とのセックスがママの死と同時期にあつたことは重要な意味を持つ。

ここから、陵にとつて都という存在がなぜ重要な他者たりえたのかについて考察する。

陵は幼い頃から何でもよくでき、大人になつて就職してからも

出世コースを歩むような、社会への適応性の高い人物である。しかし、その適応は過剰とも言えるほどであつた。その過剰さを表象しているのが陵の持つている靴の多さである。都と陵が再び共に暮らしはじめた頃、陵は服や本などに比べてかなり多くの靴を持つていた。

靴は地に足をつけて歩くために身に着けるものだ。また、社会に適応するということは、現実世界の地を踏みしめて生きていくということである。つまり、陵が服などの持ち物に比べて靴だけを多く所持しているということは、それだけ現実社会に根ざさうと必死であるということの表れと考えてよいだろう。もちろん適応を意識して靴を収集したのではないだろうが。

なぜそれほどまでに陵は必死に社会に順応しようとしてしまうのだろうか。陵は学生の頃のことを思い返し、自分自身のことを「からっぽ」だつたと感じていたと都に話している。

陵は、自分が自分の人生をしつかり生きていくという実感が薄い。自分の自身はからっぽであるかのように感じ、どこかこの世から浮いてしまうような感覚を持ちながら生きてきた。その自身の空虚さを埋めるように、現実社会に過適応していったのではないだろうか。

しかし陵は、その必死に順応しようとした社会が、実は脆く頼

りないことに気づいてしまう。そのきつかけが「地下鉄サリン事件」に遭遇したことである。陵は当時のことを思い起こし、都に次のように語っている。

おれは、死を見たくなかった。少しでも早く死から逃れようと、会社に急いだ。ビルの清潔なエントランスを抜けていつものフロアに入ってしまった。死など存在しないふりができるから。

あのころ、おれたちは死から遠かったね。おれが若かったからじゃなくて、なんだかおれたち全体が死を見ないようにしていた気がしない？

だけど、阪神の地震があったあとのサリンの事件は、おれを死に引き寄せてしまった。平原に埋まる地雷のように、死はそのへんにいくらでもあって、軽くでも踏んでしまえば、すぐさまおれを掴まえにきてしまうんだって、おれにはよくわかった。

陵は朝の通勤時にサリン事件に遭遇した後、「死」から逃れようと「清潔な」オフィスへと駆け込んだ。仕事という安定した日常に没入することによって「死」という非日常的できごとを自分か

ら遠ざけようとしたのだ。しかしその試みはうまくいかない。阪神淡路大震災に続いて起こったサリン事件は、陵を日常の守りから引きずり出し、「死」を眼前に突き付けたのだ。その時「死」への恐怖と自身の虚無感が陵を追いつめたことは想像に難くない。もはや陵にとって、出世し社会的地位を得ることが安全を守る何かではなくなってしまったのである。

追いつめられた陵は、都と再び暮らすことを選ぶ。都と陵は姉弟であり、結婚のような社会的な意味で生産性のある関係に二人が組み込まれることはない。むしろ近親相姦というタブーを犯す関係である。しかし、陵はタブーを犯してまでも都とともに生きていくことを選ぶのである。なぜその相手は都でなくてはならなかったのか。

都の一人称の語りでこのテクストは語られているため、陵の心情は推測するしかないが、陵が都にサリン事件の体験を語ったことにその手がかりがある。

陵にとつてサリン事件に遭遇したことは、自分の生き方を変えてしまうほどの重大事であり、「死」という逃れられない闇に目を向けさせられる体験でもあった。陵もまた、語りえぬ痛みを抱えた受苦者であり、物語化を必要とする人間であったのである。陵は都に自身の苦しみを語ることによって、痛みを自分のものとし

て受け入れようとしたのであろう。

痛みを語る相手は、誰でもいいわけではない。彼らは、語る内容を完璧に理解しおまけにアドバイスまでくれてしまうようなお節介な聞き手を求めているわけではない。聞こうとして身をのりだす能動性に圧迫され、むしろ沈黙してしまうことさえあるのだ。必要なのはあくまでも聞き手の「受容性」である。相手が口を開くまで決して自ら働きかけることはせず、しかし相手に気持ちを向け続ける。そして「こぼれ落ちてくる」痛みをただひたすらに受けとめる。そのように愚直なまでに受け手に徹する聞き手の前で、ようやく痛みは語られるのだ。

つまり陵が都にサリン事件の体験を語ったということは、陵にとって都が痛みを語るに足る聞き手であったということなのである。都は語り手としては未熟であったが、実は聞き手としては高い能力を有していたのではないだろうか。ママの昔話を聞き続ける中で聞き手として成熟したと考えられる。

都は陵が自ら語らないうちは、無理に聞き出すことはせず、またどうせ喋らないだろうと聞くことを諦めることもしなかった。陵が「ずっと考えつづけている」ことを信じ、陵が語り始めることを静かに待ち続けていたのだ。

陵は、自分の語りを待ち続けてくれる都に対し、自分の苦しみを

を受けとめてもらえるという確信を持ったからこそ、都に自身の体験を話したのである。

おれには、何ごともなかったのに。なのはまだあの時のことをたびたび思い浮かべてしまうのは、なぜなんだろう。直後は、危機に近づいたからなのか思っていた。でも、ちがう。ただテレビで事件を眺めていた者たちと、ほとんど変わりはない。

でも、おれには確かに、あの時の手ざわりがあるんだ。これはいつたい、何の手ざわりなんだろう。今まで生きてきた中では、決して見たことのないものの手ざわりだ。いや、かつて一回だけ、もしかしたら、おれはそれに近づいたことがあったかもしれない。まったく知らぬもの、想像してみないものならば、こんなにずっと残ったりしないにちがいない。一度でもその遠い呼び声を聞いてしまった者なら、そののち、どこでその声のこだまを聞いても、決して知らんふりできない。そういうものの手ざわりを、おれはあの時感じたんだ。感じた気がするんだ。よくわからないね。何言ってるんだ、おれ。

最後のほうは、照れていた。照れながらも、やはり陵は眠

れなかったのだ。

この部分は、陵が語ったことを都がさらに回想して語っている部分である。そのため当時の都の聴く姿勢がいかなるものであったかは、知り得ない。しかし、陵が語り終えた最後に「照れていた」ことに注目すると、都が陵にとって良い聞き手であったことは推測可能だ。

陵が語りながら照れたのはなぜか。それは、ふと自分自身がそれまでに語ったことを振り返った時、自分が思っていた以上に自身の内面を吐露していたことに気づいたからである。都が聞き役に徹したことで、陵はいつの間にか自分が語るうとしていたよりもずっと深く日常から離れたレベルのことを語っていたのである。

都が陵にとって大切な他者たりえたのは、陵の痛みの聞き手として都が適任であったからである。

さて、都にとつてはママの絶対性を崩すという意味で、陵にとつては痛みの聞き手という意味で、互いが互いにとつて重要な他者となっていたことがこれまでの考察で明らかになった。

ここで、都にとつて陵との関係が、ママとの関係ぬぎにしても、かけがえのないものとなっていくことについて、触れねばなるまい。二人が再び共に暮らし始めてから、都の陵に対する感じ方は

変化してきている。

わたしと陵は、以来ずっとわたしの部屋で寝ている。最初のうちは気になった陵の身じろぎ、寝息、小さくもした手元灯の光、そんなものは、もうすっかり天然自然のものとなつてしまった。昔はあんなにも求めた陵が、こうしてま横にいるというのに、わたしの関心はもう陵の身には集中しない。ただ、少し古びて疲れた男が隣に思うばかりだ。それはただの肉体で、けれどやはり肉体は陵で、陵、という名前を、音に出さずに頭の中で発音すると、昔、陵にこがれていた気持ちが、ゆつくりとよみがえる。

ママが生きていた頃、都は陵に恋い焦がれ、執着していた。しかし2013年現在では、都にとつて陵が強い執着の対象から日常を共に送る相手に変化していることがこの引用からわかる。都は現在の陵を「少し古びて疲れた男」と表現しており、まるで重要な愛の対象としては陵を見ていないかのようなのである。しかし、実はこれは都が陵に対して過剰な幻想を抱いていないということの表れなのである。都と陵は再び共に暮らし始め、一緒に日常を過ごすことが自然になったのだ。強烈な愛着は、相手に過剰な幻

想を抱くことから発する。そして相手を自分自身の理想像に押し込めてしまうことにもなる。そうした、相手を自分の思い通りに操作しようという欲望は、関係をゆさぶり、二人の思いをすれ違わせる。

人と人との関係とは、もともと分かりきっている相手との一体感を強化するものではない。自分の思い通りにはならない、分かり合えない他者と自分自身の間にある溝を深く思い知らされながら、それでも相手のことを分かりたいと気持ちを向け続けることなのだ。それはとても苦しく面倒とも思われることであるが、その煩わしく長い道のりを歩んだ者だけが他者と深い関係を築くことができるのである。

都と陵は、日々欠かさずにコミュニケーションを持っていた。会話内容自体はさして重要なものではなくても、ちょっとした愚痴や発見を言い合える相手がいることが互いの日常の支えになっている。「体の芯までは」入り込まずとも「少なくとも表面には届いていた」という都の言葉には、相手のことを分かっているという強迫的な感情が一切見えない。しかしながら、日々のほんの少しの会話によって、「互いの心情を察すること」ができるようになったという。互いの深層の心理まではわからずとも、毎日顔を合わせ軽い会話をするだけで、わずかな表情やまとう雰囲気

の違いに気づくことができるようになっていたのだ。何でもない会話をきちんと持てるということが、実はその先にあるであろう深い部分の思いを慮る足がかりになる。

都と陵は、日々の温かで親密な交流を通して、互いが互いに分身であるかのような関係を築いていく。二人は日常のなんでもな一日一日を、互いに思いを向けあい大切に過ごしてきた。そして、都は陵というかけがえない相手を見つけ、それによってママの呪縛から抜け出すことができたのである。陵もまた都という自身の痛みを語ることでできる対象を持ち、サリン事件の体験を言葉にすることができた。このように都も陵も、互いが互いに交換可能な相手であることを身に沁みて感じあうことによって、その関係の中に自らの生きる確かな場を見つけることができたのである。

おわりに―現在が動き出す

さて、1986年の夏に起こった都と陵の交わりは、都にとつてママから自己の中心を取り戻す役割を担っていた。そのことはすでに述べたが、実は二人の交わりが1986年の夏にあつたことにはもう一つ重要な意味がある。1985年の八月には「日航機墜落事故」が、1986年の四月には「チェルノブイリ原発事

「故」が起こっている。テキスト内でもこれらの事故について語られている。実は1986年の夏という時期は、ママが亡くなっただけでなく、社会的にも大きな意味をもつ二つの事故が起こった後の時期として意味づけられている。つまり、「水声」というテキストにおいて、1986年の夏とは、社会的な「死」と個人的な「死」とが重なり合って濃密な死の気配を帯びた時期であったと言える。都と陵の交わりにはこれらの死の体験に抗する強いエロスの働きとしての意味が隠されていたのである。この1986年を自身の言葉で語り終えたことにより、都の現在の時が再び動き出すのだ。

テキスト最後の章である「2013年／2014年」の章はそれまでの章と異なり、ほとんど時間の経過と語られる順が前後しない唯一の章である。これは、都が時系列に語れるようになったことを示している。前章の「1986年」の章においては、語ることの困難であった陵とのセックスとママの死という出来事をここに至ってついに語ることができたのである。1986年の出来事を物語化できたことにより、都はママの死と陵との交わりを自らの体験として受け入れ肯定することができたのである。その結果、ママの幻影に縛られることなく、陵との関係のなかに確かな自分自身を見出すに至る。

テキスト最後の段落に目を移そう。

また夏がくる。鳥は、太く、短く鳴くことだろう。陵の部屋を、今日はわたしから訪ねようと思う。

もはや都にとって1986年の夏の出来事はわざわざ指示語を用いて「あの夏」などと言いつつ必要のない記憶となったことがわかる。これから繰り返されるだろう未来の夏を都がおそれることはない。自ら陵との関係を持続けることを選んだ都の強さが伝わってくる。

注

注1 本稿における「物語」とは、ただのストーリーのことではない。カウンセリングの物語療法において、クライアントの傷が癒える過程で生み出される物語を参考にしたものである。河合隼雄は『心理療法序説』（岩波書店、一九九二年二月）において、物語について次のように述べている。「症状とか悩みとかいうものは、いうなれば本人が自分の『物語』のなかにそれらをうまく取り込めないことなのである。それをどうするかと苦闘しているうちに、それらの背後（あるいは上位）に存在しているものの視点から見る事が可能となり、全体としての構図が読みとれるようになる。そこに満足のゆく物語

ができあがってくるのである。」

注2 本論では年次の表記に算用数字を用いるが、これは『水声』（文藝春秋、二〇一四年九月）内の表記に倣ったものである。

注3 一九七〇年代以降、すでに大島弓子や萩尾望都ら「二四年組」による母娘関係を中心テーマとした漫画は存在していたが、近年特に母と娘の関係に対する関心が高まっている。

注4 斎藤環は『母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか』（NHK出版、二〇〇八年五月）において、母の娘に対するコントロールについて次のように述べている。「いかなる場合であれ、母の能動性と娘の受動性という組み合わせは変わらない、ということです。この能動―受動という区別は、実際の行動パターンよりも、『どちらがコントロールする立場か』という区別であるところ理解ください。漫画家のキャシー・ギーズヴィットの場合などは、母親の側があくまでも控えて、娘の人生にでしゃばらないように注意深く振る舞っているかにみえます。しかしそれでも、キャシーは母親のアドバイスが的確過ぎるといって、母親を非難するのです。たとえ母親の側が、露骨なコントロールの意図をみせなかったとしても、娘の側は敏感にそれを読み取り、苛立ちを感じながらもそれに従ってしまう。」

注5 鷲田清一『「聴く」ことの方 臨床哲学試論』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇一五年四月）

本論は修士論文「川上弘美研究―語り手（わたし）の物語とその変遷―」（東京女子大学大学院 博士前期課程・二〇一七年一月提出）の中の第三章

を書き改めたものである。引用はすべて『水声』（文藝春秋、二〇一四年九月）に拠る。

（たかまつ かえで 二〇一七年博士前期課程修了）

